

国府祭について

摘み草の会

後藤ひろ子 中村 ふじ 熊沢 聖子
滝沢すみ子 渡辺 信子 滝口美代子
北村 和江 鶴飼レイ子 望月 定子

私たちの町大磯には大きな祭りが幾つかあるが、神奈川県が無形民俗文化財に指定されている「国府祭（こうのまち）」は特に有名である。

その昔、余綾郡柳田の地に国府が置かれたといわれているのが国府本郷の地である。その頃、国司が政治、祭祀を行うため相模の大社である寒川神社、川勾神社、比々多神社、前鳥神社、平塚八幡宮を集め、国家安泰と五穀豊穡を祈った。神揃山で行われる「座問答」とは、この時行われる珍しい行事である。また、大矢場で行われる五社分

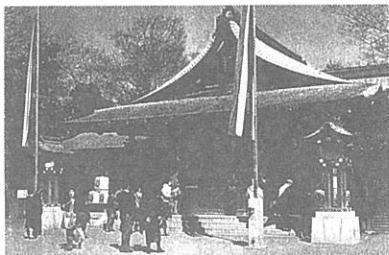
霊の祭典など、中央政府と地方の政治が祭（政）りの形になり、物語のように進められて行く古式豊かな祭典である。

千有余年続いてきたこの祭りも、時代の流れの中では、財政面やその他の理由で神輿渡御を中断した神社もあったが、その間も祭りは続けられ、数年後には、また復興して以前どおり六所神社を含めた6社が揃うようになった。

このような祭りを町に住みながらよく分からないまま過ごしてきたが、少しでも祭りの意味を知ろうと、私たち「摘み草の会」では、六所神社の宮司さんから祭りの成り立ち、行事の進め方などのお話を聞かせていただいた。そこで、私たちは祭りの全体像をカメラに収め記録しておくことを思い立った。5月5日の国府祭はもとより、それに至る準備の模様、また、地区の皆様の祭りへの関わり方などが少しずつ見えてくる中で、私たち

祭神

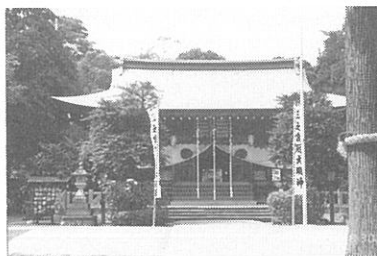
- ・一の宮寒川神社（寒川町宮上）
寒川比古命・寒川比女命



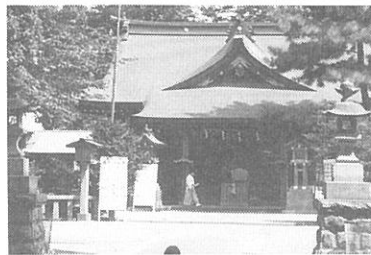
- ・二の宮川勾神社（二宮町山西）
大物忌命・級津彦命・級津姫命・大名牟遲命・衣通姫命



- ・三の宮比々多神社（伊勢原市三之宮）
豊斟淳尊・稚日女命・天櫛王命・日本武尊



- ・四の宮前鳥神社（平塚市四之宮）
菟道稚郎子命・大山咋命・日本武尊



- ・平塚八幡宮（平塚市浅間町）
応神天皇・神功皇后・武内宿称



- ・六所神社（大磯町国府本郷）
櫛稲田姫命・素盞鳴命・大国主命



も祭りへの思いを深くしていった。本報告を通して貴重なこの祭りを少しでも理解できたと思っている。

平成7年における祭事は次の日程で行われた。

◆六社の集まり（3月吉日）

今年も国府祭を行うの確認。大磯松月さんで開催された。

◆準備設営（4月29日～5月4日）

4月29日には、馬場地区の方々の奉仕により、祭（斎）場および通路（登り口）の清掃が行われた。雨上がりのあまり天気の良い日ではなかったが、朝早くから大勢の方々が参加された。

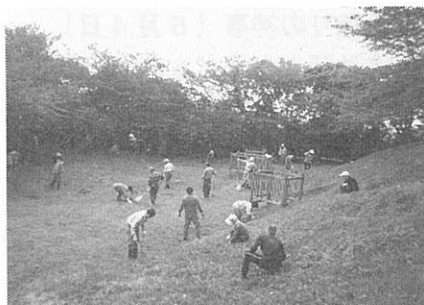
祭礼時に、神に供え、氏子や参拝者に授与されるチマキは、各神社の氏子や職員により決められた日に作られる。

ちなみに、六所神社では役員の方々が4月30日にチマキを作る材料の茅を石神台に取りに行く。そして、5月2日午後1時、六所神社境内において各地区（新宿、中丸、馬場）の役員の方々が集まってチマキ作りを行う。これは茅の中に小さな細長い餅を入れて包み、ミゴで丁寧に3箇所を縛って作る。ミゴというのは稲の芯であるが、最近では手に入りにくく、寒川神社では麻の葉で縛っているという。作り方は単純な作業のようだが気を遣う。私たちも指導を受けて作らせていただいたが、意外と難しいものだった。これらのチマキはそれぞれの神社によって作り方も数も違う。また、縛り方にも特徴が見られる。なお、六所神社は2000本作った。

各神社の日程とチマキの本数は次のとおり。

- ・寒川神社 5 / 4 2000本
- ・川勾神社 5 / 2～3 2300本
- ・比々多神社 4 / 27～28 1000本
- *茅も餅も干すので他の神社より早く作る
- ・前鳥神社 5 / 4 4000本
- ・八幡宮 5 / 3～4 1300本

また、5月3日には行在所、化粧塚作りが行われる。行在所とは神揃山に一の宮、二の宮、三の宮、四の宮、八幡宮の神輿のお在りになる場所をいう。また、化粧塚は祭場に上る前にそれぞれ所定の場所で衣服を整えるところである。なお、本年度の神揃山（五社）と大矢場（六社）の TENT 張りの当番は、中丸と馬場地区であった。



草刈り



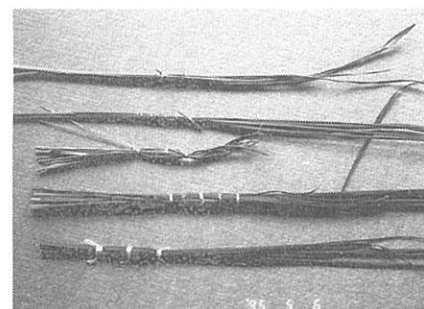
祭場の整備



チマキ作り



出来あがり



五社のチマキ

◆道浄めと浜降りの神事（5月4日）

道浄めは宮世話人や子どもたちが五社の神輿の通る順路を浄めていく行事。5月4日の午後1時から行われる。近在の小学高学年男子が六所神社に参集し、太刀、旗、槍などを持ち、神官や役員とともに五社の通り道を「ヤートサカエ（セ）」と勇ましい掛け声で浄めてまわる。「ヤートサカエ（セ）」は「永遠に栄えあれ」の意味である。

浜降りは、以前は道浄めを終えた後、引き続き隊列に神官を迎え、共に浜へ降りて波打ち際に幣を立て、祝詞を奏上して一同を浄めた。そして、足跡のない砂を手桶に入れて子どもたちが担いで大矢場の行在所に撒いて浄める。これらの神事は体力がいり、お年の方には少々つらいもののようで、「体力テストだ」などと囁かれていた。なお、現在は両行事を同時に行っている。



宮世話人の御浄め



足跡のない砂を集める



宮立



手桶に入れた砂を子どもたちが運ぶ



道を浄める（国府新宿）



神揃山を浄める



神官儀式

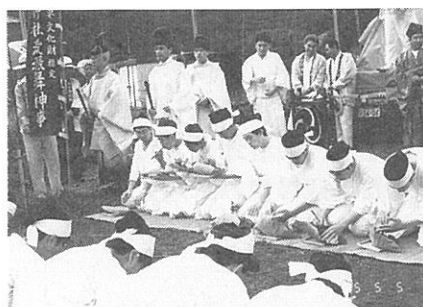


大矢場を浄める

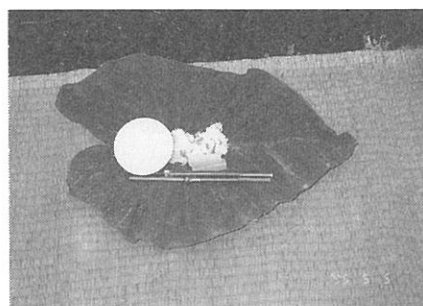
◆ 前鳥神社の麦振舞神事と化粧塚

前鳥神社の神事で、神揃山の登り口近くの化粧塚で行われる。担ぎ手である10代の若者の白丁の力づけのためにご馳走する行事である。オコワの中に唐辛子と味付けした干大根を混ぜ、それをサトイモの葉にのせ、お神酒の後に竹の箸で食する。現在は氏子の主婦たちにより作られる。なお、この神事は平塚市の重要文化財に指定されている。

また、化粧塚というのは、各社所定の場所に作られ、忌み竹が立てられて注連が張られる。神輿の渡御の途中に、この上に据えられ休息するところである。また、衣服を整え、神揃山へ登る準備もする。



麦振舞神事



馳 走



麦振舞の仕度



神揃山登り口手前の化粧塚



祝詞を奏上する



神揃山中の化粧塚



御神酒を戴く



馬場道にある化粧塚

◆五社奉迎の神事

5月5日の当日は、昨夜来の雨も上がり、朝もやの立つ頃より五社が出立し、11時頃までに神揃山に集う。途中、国府地区入口で六所神社からの在庁と呼ばれる迎神使の出迎えを受ける。これは五社それぞれ所定の場所がある。守公神（榊）を宮司よりいただく。

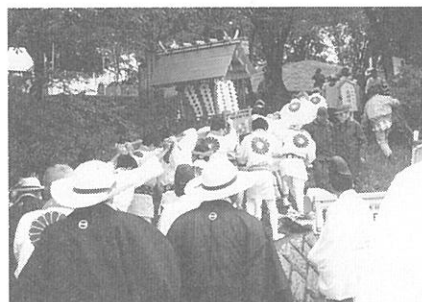
出迎え場所は、

- ・一の宮、四の宮、八幡宮 切り通し口
- ・二の宮 国府新宿の変電所前
- ・三の宮 神揃山西登り口

また、在庁とは国司の庁に勤務し、事務を行う下役人。おおむね現地の土豪から任じられた。現在は一の宮、二の宮、四の宮、八幡宮は国府新宿、中丸区長が在庁役でお迎えする。三の宮は馬場の中村氏と近藤氏が昔からその役を行っている。迎神使の迎えを受けた後、それぞれの登り口より神揃山に向かう。



三の宮触れ太鼓



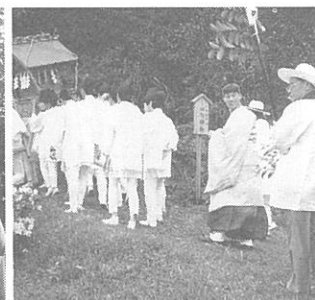
一の宮神揃山へ登る



奉迎神事（八幡宮）



二の宮



二の宮



奉迎神事（二の宮）



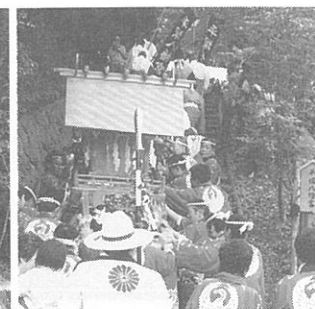
三の宮



奉迎神事（三の宮）



四の宮



八幡宮

◆五社祭典、座問答

神揃山では一の宮から順に行在所に入り、儀式が行われる。

五社が神揃山行在所に着座後、三の宮は餅撒きの行事を行う。力石の上に餅の入った俵を、担ぎ手たちが頭上より高く持ち上げては落とす。俵が破れ中の餅が出ると、それを人々に投げる。餅には無病息災の効用があるということで参拝者は争って拾う。

また、三の宮の神輿のわらび手には白く細長い包みを頂いているが、これは三の宮の御霊明神で、江戸時代頃より馬場の中村家にて預かり、在庁としてお迎えに出る際に持ち、神輿に飾る。還御の時に外し、また、中村家が1年お守りをするとの事である。

12時を合図に有名な座問答が始まり、大勢の人たちの輪の中で古式豊かな儀式が執り行われる。威儀を正して並ぶ神官、忌竹の中での虎の皮を進める神事。この神事には諸説あるようで今だ謎めいている。



座問答



一の宮御座所入り



二の宮



三の宮



四の宮



八幡宮



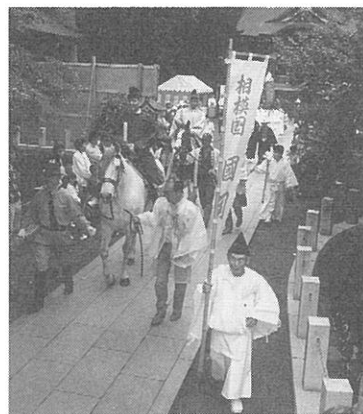
“力石” 三の宮



“御霊をいただく” 三の宮神輿

◆迎神の儀、宮立、見合の式

七度半の迎神の儀が行われる。各宮から1人ずつ選ばれた五社の総代（5名）が、陣笠、袴姿で青竹の杖をつき、「総社奉迎使」と書いた幟を先頭に六所神社へお迎えに参る。総社のおいでを願う使いの儀である。「七度半の使い」と言われた昔は、8度目に総社が出立したが、現在は1度である。六所神社を宮立し、子どもたちによる太刀、旗、槍などを従え、国司と神官は馬上にて堂々と進む。現在、国司は町長が務めている。衣服は平安時代の宮中を参考に、菅原道真を模して作られたという。見合いの式では、神揃山の坂の途中にある見合い松と、下の大矢場道の化粧塚にある見合い松の所で、神揃山の一の宮と下の総社の御輿がお互い正面を向け合い、両社が祝詞をあげたことによる。現在は上の松は枯れ、一の宮はこの式を行っていない。総社のみ行っている。総社は神揃山に向かい祝詞を奏上した後、再び馬上にて大矢場へと向かう。



総社宮立



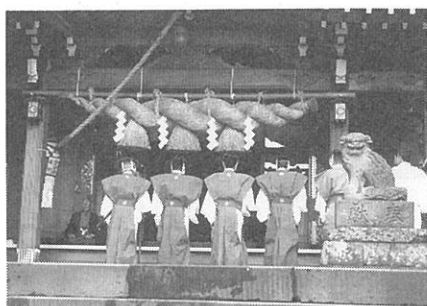
国司・宮司大矢道を行く



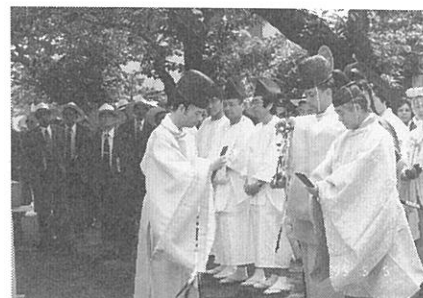
七度半の迎神の儀



総社神輿化粧塚にお成り



五社拝礼



見合の松の神事



総社大矢場祭典（七十五膳献上）

◆大矢場（逢親場）祭典

総社が大矢場に着くと同時に、舞台上の舞大夫により鷺の舞が始まる。舞いには鷺・竜・獅子の3種類の仮面があり順次舞う。舞い手としては、江戸時代六所神社の社役として舞大夫家が8軒（萩原左内・萩原伝兵衛・小沢兵庫・笠高惣太夫・笠高掃部・大橋監物・松永喜兵衛・松永左京、江戸浅草田村八太夫配下）があり、六所神社近くに住んでいた。現在は伝える人がなく、足柄下郡中井町八幡神社の舞大夫に頼んでいる。これは、六所神社の笠高家が伝えたものであると言われている。曲、舞いともに同じである。

『神奈川の芸能誌』によると、大磯最後の舞い手であった本間清吉はこう語った。

「鷺舞は天から降りてくる悪魔を祓う舞い」

「竜舞は六所神社のまわりを警護する舞い」

「獅子舞は国府祭の神饌を目指して外からやってくる厄神を祓いのける舞い」



鷺・竜・獅子舞の仮面



鷺舞



竜舞



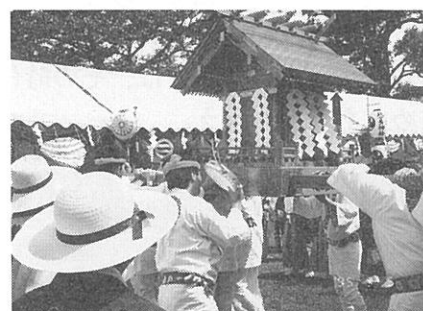
獅子舞



在 庁



大矢場お成り



一の宮最初に大矢場にお成り



四の宮御はやし



総社神輿

◆大矢場（逢親場）祭典還御

五社大矢場着七十五膳献上が行われる。五社に総社よりお神酒と御供餅が供えられる。昔は七十五膳といって国司から献上された。

次いで、各社の守公神（榊）を六所の御霊の前に供える儀式（神対面神事）が行われる。これは、新しい神々の分霊を六所へ納める式。

また、国司が一の宮から順に詣で幣を捧げる（国司奉幣）。現在は町長が国司代として平安殿上人・道真風の衣裳を着けている。

最後に総社が八幡宮から順次五社を拝礼し（神裁許）、八幡神社からお帰りになる。大矢場での神輿のお練りは賑々しく大勢の人たちでごった返す。

こうして無事国府祭は終了するが、3月の大磯における6社の集まりから始まって5月5日の国府祭当日まで、神社はもとより地区の方々の並々ならぬご努力がこうして1000年以上歴史の流れの中で祭りを支えられ、全国でも珍しい祭りの形を残し伝えてこられたのだろう。これから先、絶えることなく継承していくことは、その時代を生きる者の務めであるとも思う。



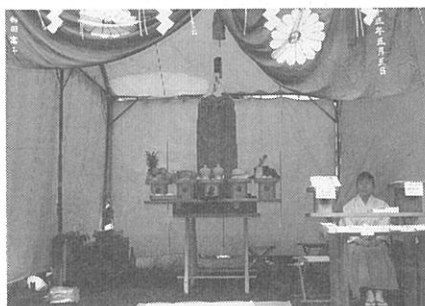
国司奉幣神事



神裁許



八幡宮より順次
五社還御



総社着座



神対面神事



神対面神事



総社還御



総社・五社分霊を鎮める